三重県埋蔵文化財調査報告２０８－５

宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ

発シ（おこし）Ａ遺跡

－第２次調査－

2003.3

三重県埋蔵文化財センター

発シＡ遺跡－第２次調査－

二〇〇三・三

三重県埋蔵文化財センター

焼失住居（ＳＨ１）

序

本書で報告する発シＡ遺跡の調査の契機となった宮川用水土地改良事業は、昭和30～40年代に行われた第一期事業に次ぐ第二期事業であります。第一期事業が行われたのは、折りしも我が国が高度経済成長を迎え、各地で大規模開発が行われた時期にあたります。その後の飛躍的な経済発展に伴い、我が国は世界屈指の経済大国となりましたが、物質的な豊かさと引き替えに、失ったものも少なくありません。近年高まりつつある「心の豊かさ」を求める世論は、戦後の経済偏重に対する反省から培われたものと言えましょう。

文化財保護に対する気運の高まりも、このような世論が背景としてありますが、地中に埋もれた埋蔵文化財は、平素、私たちの目に直接ふれることはなく、発掘調査を行うまでは、その全容が明らかになることはありません。それ故に、一般文化財とは異なり、歴史的・文化的な価値が評価されづらい面がありました。しかしながら、各地に遺存する埋蔵文化財は、その地で懸命に生きた我々の祖先の足跡であり、大地に刻まれた地域固有の歴史遺産として、かけがえのないものであることは異論のないところであります。

宮川用水第二期土地改良事業地内には、古くは旧石器時代から連綿とした人間の営みがあったことが確認されています。これらは、一度破壊されてしまうと二度と復元できません。しかし、一方で、事業完了後30余年が経過し、農業を取り巻く環境の変化による用水不足や施設の老朽化により、地域の営農活動に深刻な影響がでてきており、第二期事業も急務となっております。三重県教育委員会では、これら埋蔵文化財の保護と土地改良事業との調和を図るため、農林水産省等関係機関と協議を重ねてまいりました。その結果、工法や設計の変更等により、可能な限り遺跡の保存を行い、やむを得ず工事によって保存できないものについては、当埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し、記録として保存することになりました。

今回報告するのは、多気郡明和町に所在する発シＡ遺跡の第２次調査の記録であります。本書が消滅した遺跡に代わって、郷土の歴史・文化を未来に伝える一助となれば幸いと存じます。

なお、末筆ながら、発掘調査事業の推進にあたり、ひとかたならぬご理解とご協力をいただいた農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所並びに、社団法人中部建設協会、明和町教育委員会をはじめとする関係機関各位及び、発掘作業に従事していただいた地元の方々に心から深謝し、厚くお礼申し上げます。

平成15年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　吉水康夫

例　　言

1．本書は、三重県多気郡明和町有爾中字発シに所在する発シ（おこし）Ａ遺跡の第２次発掘調査報告書である。

2．本書に係る発掘調査は、平成13年度国営宮川用水第二期土地改良事業に伴い、三重県教育委員会が農林水産省東海農政局から受託して実施したものである。現地調査及び整理・報告書作成にかかる費用は、農林水産省東海農政局の全額負担による。

3．調査は、下記の体制により実施した。

・調査主体　三重県教育委員会

・調査担当　三重県埋蔵文化財センター

	所長	桂川　哲
	副参事	山澤義貴
調査第二課	主幹兼課長	新田　洋
	主査兼第三係長	森川常厚
	第三係主事	五嶋史佳　小山憲一
	業務補助員	北川ゆき　中島沙恵　中村敬子
		廣田洋子　山路艶子

・土工担当　社団法人中部建設協会

4．「Ⅴ．自然科学分析」は、パリノ・サーヴェイ株式会社の分析報告による。その他の報文執筆及び編集は小山憲一が行った。また、本書に掲載した写真の撮影、遺構・遺物図面の作成は、調査担当者のほか、業務補助員が行った。

5．本書で報告した遺跡の位置は、国土座標第Ⅵ系に属している。挿図の方位は、すべて座標北で示している。なお、当地域の磁北は、６度20分西偏する（平成３年現在）。

6．本書で使用した遺構表示略記号は下記による。

ＳＨ：竪穴住居　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝　Ｐｉｔ：柱穴

7．本書に使用した事業計画図及び地形図は、農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所の提供による。その他国土交通省国土地理院発行の地形図を使用した。

8．本書では、土層及び遺物の色調について小山・竹原編『新版標準土色帖』（９版1989）を使用した。

9．本書で報告した遺跡の記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

本 文 目 次

Ⅰ 前　　言 ……（小山憲一）…… 1
Ⅱ 位置と環境 ……（小山憲一）…… 3
Ⅲ 遺　　構 ……（小山憲一）…… 5
Ⅳ 遺　　物 ……（小山憲一）…… 12
Ⅴ 自然科学分析 ……（パリノ・サーヴェイ株式会社）…… 15
Ⅵ 結　　語 ……（小山憲一）…… 16

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図 …… 4
第２図　遺跡地形図 …… 6
第３図　調査区位置図 …… 6
第４図　遺構平面図 …… 7
第５図　調査区西壁・南壁土層断面図 …… 7
第６図　ＳＨ１遺物出土状況図 …… 8
第７図　ＳＨ３遺物出土状況図、ＳＨ２・３実測図 …… 9
第８図　ＳＢ４実測図 …… 10
第９図　ＳＢ４Ｐｉｔ１遺物出土状況図 …… 11
第10図　ＳＫ５遺物出土状況図 …… 11
第11図　出土遺物実測図 …… 13

表　目　次

第１表　出土遺物観察表 …… 14
第２表　放射性炭素年代測定及び樹種同定結果 …… 16

写 真 目 次

焼失住居（ＳＨ1）…… 巻頭カラー
調査風景 …… 19
ＳＨ１実測風景 …… 19
ＳＨ１遺物出土状況 …… 20
ＳＨ１土器出土状況 …… 21
ＳＨ１炭化木片出土状況 …… 21
ＳＨ１完掘状況 …… 22
ＳＨ３土器・粘土塊出土状況 …… 22
ＳＢ４Ｐｉｔ１遺物出土状況 …… 23
ＳＫ５遺物出土状況 …… 23
ＳＨ２・３ …… 24
調査区全景 …… 24
出土遺物 …… 25･26
ＳＨ１出土の木材・炭化材 …… 27

Ⅰ　前　　言

1　調査に至る経緯

当事業の全体についての調査に至る経緯や保護協議、調査体制等については、既刊の「発掘調査報告Ⅰ」[1]に詳述しているため、ここでは省略する。詳細については前掲書を参照されたい。また、当事業に伴う平成13年度の調査全般の概要については、既刊の「発掘調査概報Ⅲ」[2]を参照されたい。

発シＡ遺跡の第２次調査区は、平成12年度の本事業に伴い実施された第１次調査区の西側近接地である。年度当初の計画では、平成11年度の同事業に伴い実施された発シＢ遺跡第３次調査区[3]の隣接部分を第４次調査として本調査を実施する予定であったが、以下のような経緯で、発シＡ遺跡第２次調査の実施に至った。

当該地の現地調査は工事施工の際に行うこととなっていたため、事前の三者協議において、当該工区の施工業者も同席し、工事の工程に埋蔵文化財調査を組み込み、両者を平行して進行させていく詳細な計画を策定した。調査対象範囲は、当初、既設水路の底部が中心となっていたため、施工前の範囲確認調査が困難なことから、発シＢ遺跡第３次調査区とその東側の暗渠導水部の間をすべて要本調査範囲とし、調査計画を策定することで三者とも合意していた。しかし、設計が確定した時点で、工事用の仮設道路の敷設直前に範囲確認調査が可能となったことから、既設の管理用道路上において、９月20日に範囲確認調査を実施した。その結果、緩勾配の丘陵尾根付近で遺構は途絶えており、その東側では既設水路の底部よりも高いレベルで遺構面を確認した。従って、遺構を検出した範囲を、丘陵の東斜面に立地する発シＡ遺跡の西側縁辺部と判断し、第２次調査対象範囲とした。発シＡ遺跡第２次調査区は工事用の仮設道路敷設予定地であるが、設計上ルート変更が不可能であり、なおかつ工事完了後は新設用水路の恒久的な管理用道路として使用されることから、現状保存は不可能となった。従って、本体工事の遅滞を避けるために、準備が整い次第、現地調査に着手することとなった。

2　調査の経過

(1) 調査経過の概要

調査はまず、要本調査範囲の確定作業から始める必要があった。施工計画では、調査対象地である既設の管理用道路を計画水準まで削平するため、これに影響を受ける範囲が自動的に要本調査範囲となることから、10月９日～11日に工事立会いを実施し、150㎡の調査区を確定した。人力掘削に着手したのは10月15日である。地山と遺構埋土のコントラストは明瞭で、検出は比較的容易であったが、調査区は傾斜地のため、掘削作業や廃土の処理に困難が生じた。また、調査区の東西で改修工事が平行して行われていたが、線的な事業地のため、施工業者の通用路の確保を求められ、調査区の一部をそれに当てざるを得ず、調査・作業がやや煩雑となった。

現地調査は11月２日に完了した。狭小な調査区ながら、遺構密度は比較的高く、弥生時代末期～奈良時代の集落跡を確認するに至った。特に、検出例の少ない焼失住居跡が確認できたことなどの成果を得ることができた。

なお、調査終了後、水路構造物の撤去が完了していた発シＢ遺跡の範囲確認調査を直ちに行ったが、施工予定範囲の既設水路底部は、遺構面が遺存していないことが判明したため、発シＢ遺跡の第４次調査は発生しなかった。[4]従って、11月２日をもって当該工区の全調査は終了し、即日、施工業者に用地の引渡しを行った。

(2) 調査日誌（抄）

10月９日　管理用道路の整地土除去（立会い）。
10月11日　整地土除去完了。地区杭・ＫＢＭの設置。
10月15日　人力掘削開始。包含層掘削。
10月19日　ＳＨ１検出、掘削。
10月22日　ＳＨ１掘削。多量の炭化木片検出。焼失住居と判明。
10月23日　調査区西壁土層断面図実測完了。
10月25日　ＳＨ１遺物出土状況写真撮影・出土状況図実測。ＳＨ６検出。調査区南壁土層断面図実測完了。

10月26日　ＳＨ１遺物出土状況図実測完了。ＳＨ６掘削。遺物出土多量。

10月29日　ＳＨ６に重複するＳＨ11検出。ＳＫ９遺物出土状況写真撮影・出土状況図実測。

10月30日　ＳＨ11主柱穴・炉跡検出。ＳＫ５・ＳＨ６遺物出土状況写真撮影・出土状況図実測。

10月31日　調査区全景写真撮影。遺構全図の実測用ポイントの設置。

11月１日　遺構全図の実測。

11月２日　遺構全図の実測完了。調査終了・現場撤収。用地の引渡し。

3　調査の方法

(1) 地区設定について

東西に長い調査区であるため、方位に添うように４ｍ方眼の地区杭を設置した。但し、この小地区方眼は任意による設定のため、国土座標軸とは合致していない。地区杭には、北～南に数字、西～東にアルファベットを付与し、各地区の北西杭を当該地区名とした。

(2) 掘削の方法

掘削は、整地土を重機で行い、包含層及び遺構を人力で行った。

(3) 遺構図面の作成について

遺構図面の作成は、すべて手書きによる。各図の作成時の縮尺は以下のとおりである。

・平面図（全図）…１：20
・等高線図…１：100
・遺物出土状況図…１：10
・土層断面図…１：20

(4) 遺構写真について

調査区全景及び個別の遺構写真は、ローリングタワーを設置して撮影した。フィルムは、６×７㎝版（モノクロ、カラーポジ）に加え、35㎜版（モノクロ、カラーポジ、カラーネガ）を使用した。カメラは、アサヒペンタックス６×７、ニコンＦＭ２を使用した。

〔註〕

① 小山憲一・筒井正明『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ　外山遺跡・片蔦Ｃ遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）
② 小山憲一・五鳩史佳『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター、2002年）
③ 小山憲一『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ　発シ日遺跡－第３次調査－』（三重県埋蔵文化財センター、2001年）
④ 前掲註②

Ⅱ 位置と環境

1 位置

発シA遺跡（1）は、南伊勢の海岸平野上に位置する、玉城丘陵北端の丘陵支脈東側縁辺部に立地する。行政上の所在地は、三重県多気郡明和町有爾中である。遺跡立地の玉城丘陵は、全般に小さい谷が樹枝状に入り組んだ、標高30～100m程度の比較的起伏の小さい丘陵である。当丘陵の縁辺部は、台地もしくは段丘となり、現在も生活の場として多くの集落が形成されている。丘陵の北東部には明野台地が位置し、北部・西部には櫛田川及び、かつては櫛田川の本流であったとされる支流の祓川によって形成された沖積平野が広がる。玉城丘陵は、高見山地から多気丘陵、さらに当丘陵へと減高し、明野台地を隔てて伊勢湾に達する丘陵としての末端部で、当遺跡は、一部の独立丘陵を除けば、北方の伊勢湾を臨む丘陵地の最末端に位置している。

2 環境

当遺跡の周辺地域は、埋蔵文化財が高密度に分布する地域として知られる。人々の営為の跡は旧石器時代にまで溯ることができ、以降の各時代の遺跡も多数確認されていることから、人々が絶え間なく生活の場としてこの地域を利用してきたことが窺える。また、伊勢神宮や斎宮の成立以後は、この地域が南伊勢地方の政治・経済・文化の一翼を担ったと考えられる。以下、本報告と同時代の歴史的環境について、発掘調査等の成果を中心に概観したい。

櫛田川右岸の明野台地上では、弥生時代前期から複数の集落が営まれた。弥生文化が南勢地方へと伝播したルート上の遺跡として位置付けされた金剛坂遺跡（2）では、前期～後期を通じて大規模な集落が営まれる。[1]また、中期を主体とした斎宮跡古里地区[2]（3）や、中期～古墳時代初頭に至る寺垣内遺跡[3]（4）、後期～古墳時代初頭を中心とする北野遺跡[4]（5）、コドノB遺跡[5]（6）等で、竪穴住居や方形周溝墓が多数検出されている。

続く古墳時代には、玉城丘陵を中心に、多数の古墳が造営される。ただし、櫛田川以南では、前期の古墳は現認されておらず、この地域の古墳の初現は、5世紀前半の方墳である権現山2号墳（7）とされるが、小社遺跡（8）では石鏃が表採されており、この遺物は周辺に前期古墳が存在した可能性を示唆している。[7]

5世紀後半代になると、高塚1号墳（9）、大塚1号墳（10）、神前山1号墳（11）といった帆立貝式前方後円墳が順次築かれる。高塚1号墳は県下有数の規模を誇り、櫛田川以南では最大である。また、神前山1号墳は、画文帯神獣鏡3面の出土が特筆される。[8]後期初頭には、中山6号墳（12）、斎宮池12号墳（13）、ユブミ2号墳（14）等の前方後円墳が築造される。また、玉城丘陵以外の独立丘陵部や平野部に大仏山10号墳（15）や野田古墳（16）、かも塚古墳（17）、稲生1号墳（18）、宮西古墳（19）等の首長墓相当の古墳も造営される。このような中期～後期の大型墳の分布状況は、県内屈指である。

後期群集墳の分布状況をみても、玉城丘陵を中心に無数の古墳が築造されている。10支群・99基からなる河田古墳群（20）は一部発掘調査されており、6世紀中葉～7世紀中葉の群集墳であることが判明している。[9]発シA遺跡の隣接丘陵上には発シ古墳群（21）が所在し、斎王惇子内親王の陵墓と伝承されている。[10]また、西方へ延びる同一丘陵支脈上には、垣場古墳群（22）や合戦田古墳群（23）、戸峯古墳群（24）が立地する。一部発掘調査された戸峯古墳群では、6世紀前半～7世紀前半の遺物や直刀等、比較的豊富な副葬品が出土している。[11]その他、特に列挙はしないが、現認の総数は500基を超えており、その密集ぶりは南勢地方最大である。

中期～後期古墳の密集ぶりと相反し、この地域の同時代の集落跡の確認例は少ない。しかし、近年発掘調査された古曽浦りB遺跡（25）では、くり抜き井戸の付随する、前期の四面庇の掘立柱建物が確認され、豪族居館の施設と想定されている。[12]また、中の坊遺跡（26）では、多数の土師器高杯が出土した中期の大型竪穴住居が検出されている。[13]北野遺跡では、初頭及び後期の竪穴住居等が、[6]堀田遺跡（27）

第1図　遺跡位置図(1:50,000)『この地図は、国土地理院発行の2万5千分1地形図(松阪・明野・国束山・伊勢)を掲載したものである。』

では、後期の竪穴住居や土坑が確認されている[35]。

斎宮制度確立前後のこの地域には、特筆すべき点がある。それは、土師器の一大生産地帯としての側面であり、発シＡ遺跡の所在地周辺では、飛鳥時代以降、画一的で集約的な土師器生産が開始される。その様相を示すのが土師器焼成坑の存在であり、この地域での検出数が400基を越えるという事実がそれを如実に物語る。今のところ、この地域で前述のような生産が開始されたのが、６世紀中葉の北野遺跡とされている。以後、８世紀にかけて堀田遺跡、戸峯遺跡（28）、水池土器製作遺跡（29）、カリコ遺跡（30）、発シＡ遺跡、発シＢ遺跡（31）等で生産された。これらの遺跡の所在地域は、かつて「有爾郷」と呼ばれた地域に属し、古来より伊勢神宮への調進土器を生産していた地域として知られ、文献史学を中心とした小林氏の検証により、古代以来中・近世においても、神宮への土器調進を行っていたことが明らかにされている[36]。その伝統は近代以降も継承され、現在、同町蓑村に所在する神宮御料土器調製所は、今なお調進土器を貢納し続けている。

〔註〕

① 山澤義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』（明和町教育委員会、1971年）
田村陽一・浅尾悟・宮田勝功「Ⅲ　多気郡明和町金剛坂遺跡」（『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1985年）
『三重県埋蔵文化財センター年報５』（三重県埋蔵文化財センター、1994年）
萩原義彦・川崎志乃『金剛坂遺跡（第４次）・辰ノ口古墳群（第２次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）
奥野実『金剛坂遺跡（第５次）・辰ノ口古墳群（第３次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2001年）
② 山澤義貴『古里遺跡発掘調査報告－Ｃ地区－』（三重県文化財連盟、1973年）
谷本鋭次『古里遺跡発掘調査報告－Ｄ地区－』（三重県文化財連盟、1974年）
③ 『三重県埋蔵文化財年報16・17』（三重県教育委員会、1986年・1987年）
④ 田村陽一「北野遺跡」（『平成２年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告　第２分冊』三重県埋蔵文化財センター、1991年）
『三重県埋蔵文化財センター年報４・５・６』（三重県埋蔵文化財センター、1993年・1994年・1995年）
竹田憲治・広岡公夫『北野遺跡（第５次）発掘調査概報』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）
⑤ 西出孝『コドノＢ遺跡（第２次・第３次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）
⑥ 下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」（『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』多気町教育委員会、1986年）
⑦ 前川嘉宏「第二編第一章第三節　古墳時代」（『玉城町史　上巻』玉城町、1995年）
⑧ 前掲註⑥
⑨ 下村登良男「第二編第五章　古墳時代」（『多気町史　通史』多気町、1992年）
⑩ 『明和町遺跡地図』（明和町、1988年）
⑪ 「戸峯遺跡現地説明会資料」（明和町教育委員会、1990年・1991年）
⑫ 奥野実『古轡通りＢ遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）
⑬ 伊藤裕之『中の坊遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1997年）
⑭ 前掲註④
⑮ 伊藤久嗣・伊勢野久好「Ｘ　多気郡明和町堀田遺跡」（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1981年）
⑯ 小林秀「中世後期における土器工人集団の一形態－伊勢国有尓郷を素材として－」（『研究紀要』第１号、三重県埋蔵文化財センター、1992年）

Ⅲ　遺　　構

１　地形と基本層序

今回調査区は、遺跡の西側縁辺部の南傾する緩斜面に位置し、現況は用水路の管理用道路である。事前の範囲確認調査では、事業地内に約300㎡の遺跡範囲が確認されたが、西半は遺構面に工事の影響が及ばないため現状保存となり、第３図の範囲（150㎡）を対象に調査を行った。

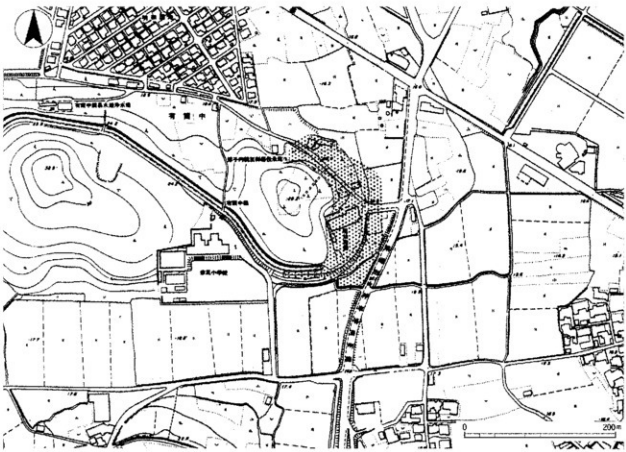
層序は、道路敷設の際に1.5～2.5ｍ程の整地土が盛土されているものの、基本的には（旧）表土、もしくは整地土直下で橙色粘質土の遺構検出面に達する。検出面のレベルは、標高21～22ｍ前後である。

２　検出遺構

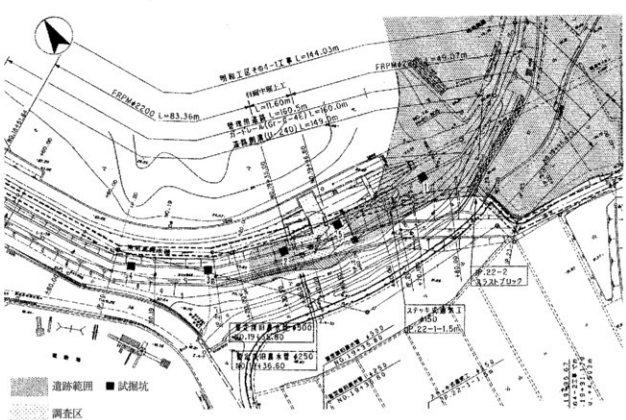
検出した遺構は、竪穴住居３棟、掘立柱建物１棟、土坑５基、溝２条などである。遺構の時期は、出土遺物から、概ね弥生時代末期～古墳時代初頭と飛鳥～奈良時代の二時期に大別される。

(1) 弥生時代末期～古墳時代初頭の遺構

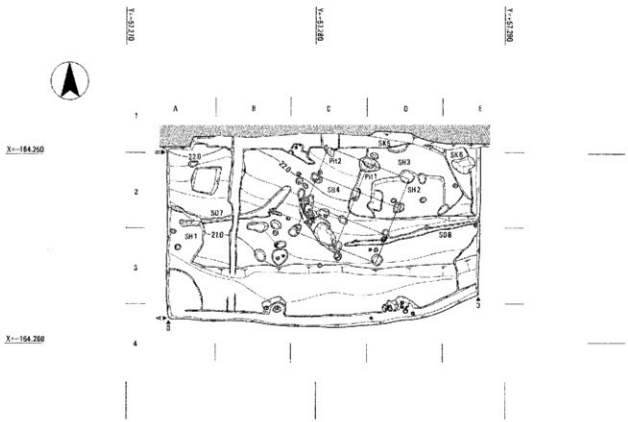
ＳＨ１　調査区の西隅に位置する竪穴住居跡である。調査区外に延長し、低位の南端部が一部削平されているため、全体の規模・形態は不明であるが、平面形態は概ね隅丸方形と思われる。緩斜面を削平してフラットな床面を形成しており、中央部では主柱穴



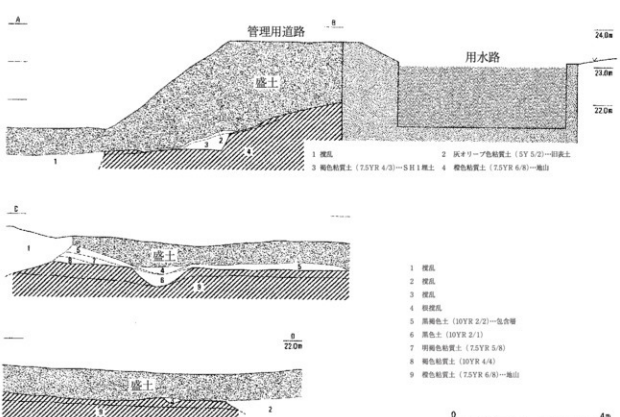
第２図　遺跡地形図（１：5,000）



第３図　調査区位置図（１：1,000）



第４図　遺構平面図（１：200）



第５図　調査区西壁・南壁土層断面図（１：100）

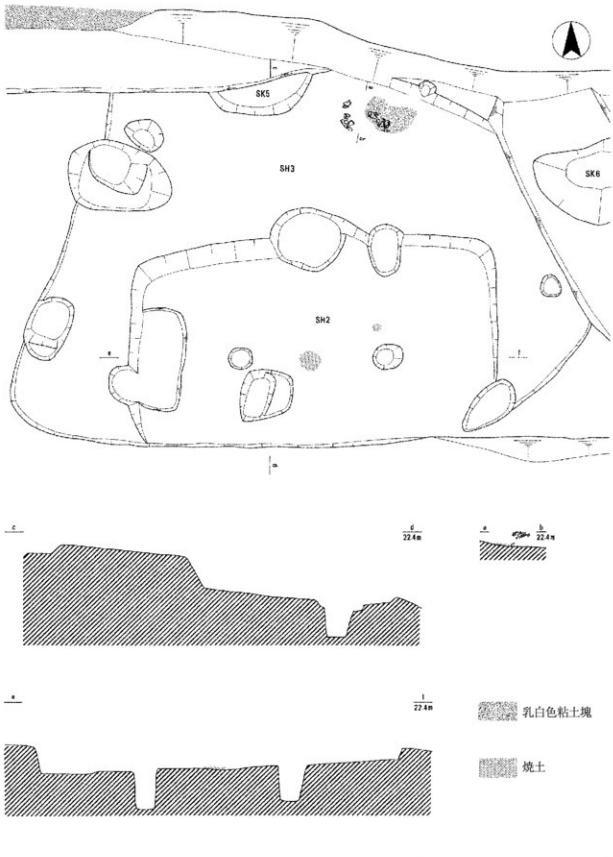
とみられるピットを２基検出した。埋土は褐色粘質土の単層で、多量の炭化物や焼土粒を包含していた。床面付近では炭化木片が散在しており、北側周壁の一部やその延長上の地山面が、被熱により赤色に変色していた。炭化木片は、検出の範囲内ではあるが、主柱の内側にはほとんど認められず、外側で顕著に認められた。また、北側周壁の一部に壁溝が認められ、羽目板と思われる炭化した木片が、ほぼ原位置を保持した状態で出土している。以上の状況から、ＳＨ１は焼失住居と考えられる。出土遺物は、敲石（1）及び弥生土器高杯（2）のみであるが、これらを時期判断の根拠とすると、ＳＨ１は弥生時代末期の住居跡と考えられる。ただし、後述の自然科学分析では、サンプル採取した炭化材の放射性炭素年代測定の結果、年代は弥生時代早期～前期に比定されており、両者の年代観には大きな誤差が生じている。しかし、いずれの遺物も、その出土状況から、遺構の時期判断の根拠となり得るものであり、課題は残るが、古材の再利用や樹齢による誤差とみなし、ここでの時期判断は土器によるものを優先して、弥生時代末期の住居跡としたい。

ＳＨ２　調査区北東端でＳＨ３と重複した形で検出した竪穴住居跡である。平面形態は東西に長い長方形を呈するが、南端部が若干撹乱されていることから、本来は方形であった可能性が高い。高位の緩斜面をより深く掘り込み、平坦化した床面中央部では主柱穴とみられるピットを２基検出した。また、そのほぼ中間地点で径20㎝程度の焼土も確認しており、これは地床炉の可能性がある。ＳＨ３との新旧関係については、当初の検出段階ではＳＨ３一棟の認識だったことに加え、埋土が単層である見通しからセクションベルトも設定しなかったため、埋土の土層観察からの判断機会を逸した。また、調査の途上まで出土遺物の峻別を行っておらず、遺物からの早計な時期判断もできないが、前述の焼土が地床炉と仮定すれば、この地方で作り付けカマドが普及・定着した６世紀代よりも遡る住居となることから、ＳＨ２はＳＨ３に先行すると考えられる。さらに、弥生時代末期～古墳時代初頭とみられる土器片が出土していることから、当該期の住居跡と判断した。

⑵ 飛鳥～奈良時代の遺構

ＳＨ３　調査区北東端の緩斜面に位置する竪穴住居跡である。北端と東端の一部が撹乱により残存しておらず、さらに南端部も若干撹乱されている可能性があるため、平面形態の全容は判然としないが、方形に近い形態と考えられる。南半部で重複しているＳＨ２は、前述のとおり高位の北側の地山をしっかり掘り込み、フラットな床面を形成しているのに対し、ＳＨ３は地山の掘り込みが10㎝前後と浅く、床面も平坦化されていない。用水路至近の調査区内の最高位に位置し、整地土直下で検出面に達したことから、若干の削平を受けている可能性も考えられる。また、ＳＨ２との重複から柱穴等も検出できなかった。埋土は褐色系粘質土の単層で、炭化物や焼土粒を包含していた。遺物は、土師器と若干の須恵器、混入遺物の古式土師器が出土している。特筆すべき

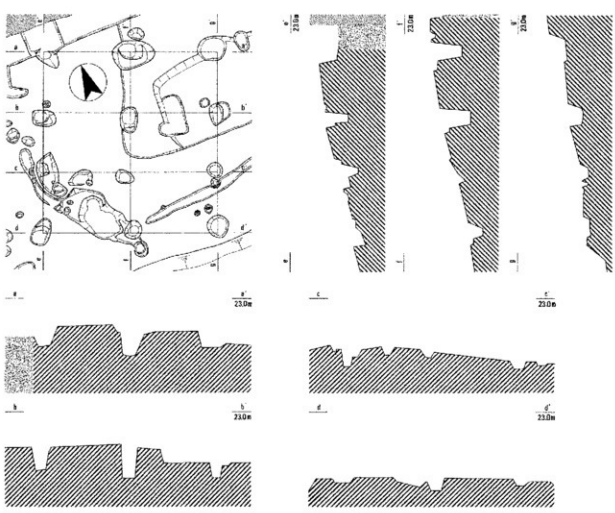
第６図　ＳＨ１遺物出土状況図（１：40）



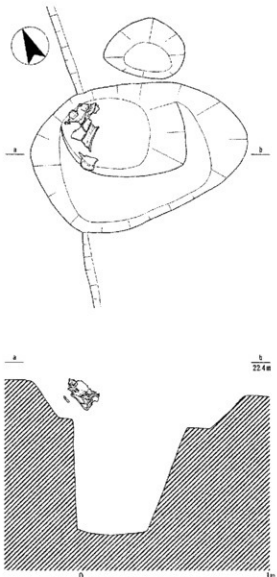
第７図　ＳＨ３遺物出土状況図、ＳＨ２・３実測図（１：40）

は、北端部の床面上で検出した乳白色の粘土塊である。0.3×0.5m程度の範囲に、約4cmの厚みで床面に貼り付いた状態で検出され、その上面では土師器甕（7・8）が出土している。遺構の時期は、出土した須恵器蓋杯（11・12）が、中村編年のⅡ－4～5型式に所属することや、土師器は甕類しか出土していないが、その口縁部形態の特徴から飛鳥時代の所産と考えられるため、ＳＨ３は飛鳥時代の住居跡と判断した。

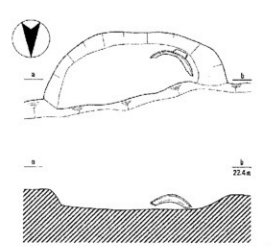
ＳＢ４　ＳＨ２・３に一部重複する形で位置する掘立柱建物跡である。３間×２間、Ｎ21°Ｅの南北棟総柱建物で、桁行4.8m、梁行4.6mの規模を有する。柱間は、桁行各1.6m、梁行各2.3mの等間である。柱掘形は不定形で、長径1mを越えるものがある一方、径40cmに満たないものもある。また、検出面から80cm以上地山を掘り込んだものから、10数cmに留まるものもある。これらを概観すると、高位の北側ほど柱穴の規模や掘削深度が大きい傾向にあると言える。掘形の規模が最も大きいのは、北辺の梁中央の柱穴（Ｐit1）で、土師器甕が2個体（13・14）出土している（第9図）。前述のような柱掘形の傾向は、傾斜地という立地条件に起因するものか、あるいは調査区の南半部がある程度削平されている可能性が高いため、柱穴の上部が削平され、底部のみが残存した可能性も考えられる。状況判断としては、後者の方がより合理的と言えよう。各柱穴の埋土は、黒～暗褐色の粘質土で、ほとんどが炭化物や焼土粒を包含しており、特にＰit1・2が顕著であった。出土遺物は、前述のＰit1以外からは、いずれも小片しか出土していないが、概ね飛鳥～奈良期のものと考えられるため、遺構の時期は飛鳥～奈良時代と考えられる。



第8図　ＳＢ４実測図（1：100）



第９図　ＳＢ４Ｐｉｔ１遺物出土状況図（１：20）



第10図　ＳＫ５遺物出土状況図（１：20）

ＳＫ５　ＳＨ３の北側床面で検出した土坑である。北側が撹乱されているため全容は不明であるが、平面形態は楕円形と推察される。飛鳥時代の土師器甕(15)が出土しているため、ＳＨ３と同時代ではあるが、付随遺構か否かは判断できなかった。

(3) 時期不明の遺構

ＳＫ６　調査区の北東隅に位置する土坑である。遺構の上半部は撹乱されており、下半～底部のみの残存であるが、平面形態は不整楕円形を呈し、深さは最大60㎝程度ある。付近の遺構検出面のレベルから想定すると、当初の深さは１ｍ程度あったものと思われる。埋土は黒～暗褐色の粘質土一層で、炭化物や焼土粒を包含していた。遺物が全く出土しなかったため、時期は不明であるが、埋土の状況からＳＨ３・ＳＢ４と同時期の可能性がある。

ＳＤ７　調査区の西半部に位置する溝である。東端部は等高線に直交し、西半部はほぼ水平となる。また、西端部はＳＨ１を切っている。数片の土師器小片が出土しているものの、時期判断が可能な遺物は得られなかった。後述のＳＤ８との関連性は認められず、構築目的も不明である。

ＳＤ８　調査区の東半部に位置し、等高線に対してほぼ水平に延びた溝である。幅20cm内外、深さ10cm足らずの規模で、東端は調査区外に延長する。埋土は灰オリーブ系の粘質土で、出土遺物は皆無であった。ＳＨ２・３との位置関係から、何らかの関連性が想定されなくはないが、埋土の状況から当該遺構と同時期に存在したとは考えにくく、溝の性格は不明と言わざるを得ない。

〔註〕

① 中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」（『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会、1978年）

Ⅳ 遺　物

今回の調査では整理箱８箱程の遺物が出土したが、丘陵上に立地する遺跡出土のためか風化が進行しており、遺存状態は必ずしも良好とは言い難い。出土遺物の大半は、飛鳥～奈良時代の土師器であるが、弥生土器や古式土師器、須恵器も若干出土しており、石器も１点出土している。以下、遺構別に概要を記すが、個々の詳細は遺物観察表を参照されたい。

１　ＳＨ１出土遺物

出土遺物は２点である。（１）は敲石と思われる。石材は砂岩で、側縁や中央付近に敲打痕が認められる。敲打痕の否認面は非常に滑らかであり、磨石としての用途も考えられる。また、中央付近に敲打痕が認められるため、凹石の可能性も否定できない。いずれにせよ、多用途に利用されたものと推測される。

（２）は弥生土器高杯で、杯部は底部のみの残存である。脚部は低く、大きく外反し、上端の杯部との接合部外面に、櫛描横線文が６条施文される。透孔は、脚高の1/2の位置に３方施される。杯部の底部外面には、縦方向のヘラミガキが僅かに認められるが、器面の劣化が著しく、他の調整は不明である。杯部の口縁部形態は不明であるが、椀状あるいはワイングラス状の形態をとると考えられる。

２　ＳＨ２出土遺物

図化できたのは、（３）と（４）の古式土師器２点である。（３）は高杯であろうか。上部は残存しないため器形は不明であるが、脚部は低く、大きく外反する。器面の劣化が顕著ではあるが、上半の内外面には指圧痕跡が明瞭に残る。（４）は台付甕である。台部はやや低く、直線的に開く。台部の器壁は体部に比して比較的厚い。色調はにぶい橙色を呈する。

３　ＳＨ３出土遺物

（５）・（６）は共に残存度が低く、内面の剥離等、劣化が著しいため器種は特定し難いが、それぞれ古式土師器の壺・甕とみられる。（５）は径８㎝程の平底で、緩やかに体部が立ち上がる。（６）は底径５㎝程度で、若干の上げ底となる。ＳＨ２からの混入遺物と考えられる。

（７）～（10）は土師器甕である。いずれも口縁部が「く」字状に屈曲し、端部を摘み上げ、外面に面を形成する。器面の劣化が著しく、調整の判別は困難であるが、基本的に口縁部をヨコナデし、体部外面は縦方向、内面は横方向のハケメ調整がなされていると考えられる。（８）～（10）の口縁部内面は肥厚し、（８）は端部の摘み上げが顕著である。（７）は他に比して口縁部の屈曲が弱く、内面の肥厚も見られない。いずれも体部上半部までの残存のため、下半部の器形や調整は不明であるが、（10）は甕よりはむしろ鍋に近い形態になると思われる。これらはいずれも飛鳥時代の所産と考えられるが、（７）は、やや新相を示すものと言えよう。

（11）は須恵器蓋、（12）は杯である。（11）は天井部から口縁部にかけて緩やかな曲線を描き、端部は丸く仕上げられる。天井部が残存しないため断定はできないが、外面のロクロケズリはないと考えられる。（12）は口縁部の立ち上がりが短くやや内傾し、端部は丸く収められる。器高は３㎝未満で、低く扁平な形状を呈する。底部外面には工具痕跡が認められるが、外面のロクロケズリの有無は不明。これらはともにⅡ－４～５型式[3]並行で、６世紀後半頃の所産と考えられる。

４　ＳＢ４Ｐｉｔ１出土遺物

共に口縁部が「く」字状に屈曲し、口縁部内面が肥厚する。また、端部は摘み上げられ、外面に面を持つ。（13）は口径と体部最大径がほぼ同じであるのに対して、（14）は体部最大径が口径を大きく上回る。いずれも体部下半は残存していないが、体部の形状は（13）が球形、（14）は長胴と考えられ、（14）は上村分類の甕Ｅ[2]に比定される。飛鳥時代の所産であろう。

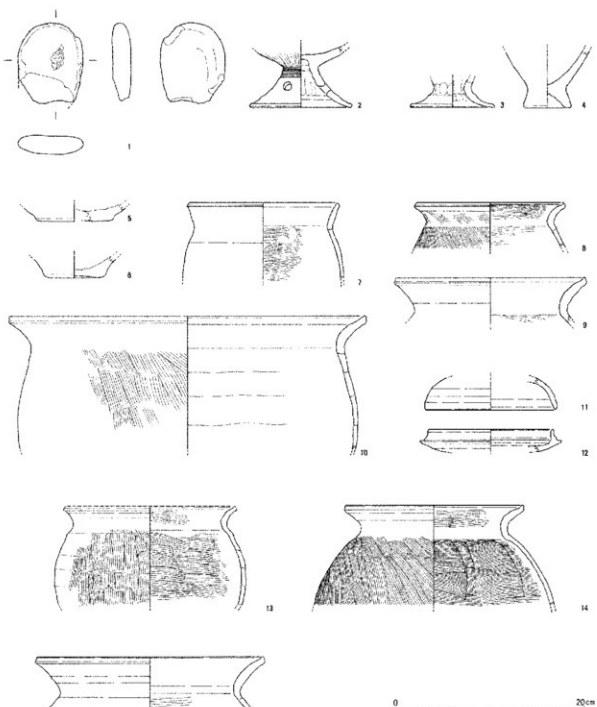
5　ＳＫ５出土遺物

出土遺物は（15）の土師器甕１点のみである。頸部～口縁部までの残存であるが、口縁部の形態は、前述のＳＨ３及びＳＢ４ Pit１出土の土師器甕と同様の特徴を持つ。器面の劣化のため、調整は不詳であるが、体部内面に横方向のハケメ調整が認められる。所属期は飛鳥時代と思われる。

〔註〕

① 中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」（『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会、1978年）

② 上村安生「伊勢・伊賀における古代土師器煮沸具の様相」（『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム、1996年）



第11図　出土遺物実測図（１：４）

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量（cm）			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
1	004-05	敲石	SH1	2 A 3 A SH1	全長 8.6 全幅 6.9	最大厚 2.0	重量 177.32 （g）	――――――――	（石材） 砂岩	―	――――――	約1/4 欠損	
2	004-02	弥生土器 高杯	SH1	2 A 3 A SH1	―	―	底部径 10.4	内：杯部ナデ？、脚部ナデ 外：杯部ヘラミガキ、脚部接合部欄描き横板文6条、透孔3方 ※摩滅の為調整不明瞭	粗 1.5㎜以下の砂粒含	良	外：橙5YR7/6 内：明黄褐10YR7/6	底部 1/6	
3	004-03	古式土師器 高杯	SH2	2 D SH11	―	―	底部径 9.0	内：指オサエ・ナデ、端部ヨコナデ？ 外：指オサエ・ナデ、端部ヨコナデ？ ※摩滅の為調整不明瞭	粗 4㎜以下の砂粒含	不良	にぶい黄橙10YR7/4 ～ 淡黄2.5Y8/4	底部 1/3	
4	004-04	古式土師器 台付甕	SH2	2 D SH11	―	―	底部径 4.8	内：ナデ？ 外：ナデ？ ※摩滅の為調整不明瞭	粗 2㎜以下の砂粒含	やや良	にぶい橙7.5YR7/4	底部 完存	
5	002-04	古式土師器 壺	SH3	2 D SH6	―	―	底部径 8.0	内：剥離の為不明 外：ナデ ※摩滅の為調整不明瞭	粗 2㎜以下の砂粒含	良	明黄褐10YR7/6	底部 1/3	
6	002-05	古式土師器 甕	SH3	2 D SH6	―	―	底部径 5.0	内：剥離の為不明 外：ナデ ※摩滅の為調整不明瞭	粗 2㎜以下の砂粒含	不良	にぶい黄橙10YR7/4	底部 1/3	
7	002-02	土師器　甕	SH3	2 D SH6	15.6	―	―	内：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（7本/㎝）、指オサエ 外：口縁部ヨコナデ、体部摩滅の為不明	粗 4㎜以下の砂粒含	不良	明黄褐10YR7/6	口縁部 1/3	
8	002-03	土師器　甕	SH3	1 D SH6	15.5	―	―	内：口縁部ヨコナデ、口縁部～体部ハケメ（5～6本/㎝） 外：口縁部ヨコナデ、口縁部～体部ハケメ（5～6本/㎝）	やや粗 3.5㎜以下の砂粒含	不良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 1/3	内外面 煤付着
9	002-01	土師器　甕	SH3	2 D SH6	20.0	―	―	内：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ？ 外：口縁部ヨコナデ、体部不明	粗 5㎜以下の砂粒含	やや不良	明黄褐10YR7/6	口縁部 1/4	
10	001-01	土師器　甕	SH3	1 D 2 D SH6	37.8	―	―	内：口縁部ヨコナデ、体部摩滅の為不明 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（4本/㎝）	粗 3㎜以下の砂粒含	やや不良	橙7.5YR7/6	口縁部 1/5	
11	002-06	須恵器　蓋	SH3	2 D SH6	13.9	―	―	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	やや密 2㎜以下の砂粒含	良	灰白N7/0	口縁部 1/8	
12	002-07	須恵器　杯	SH3	1 D SH6	13.1	―	―	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ（底部に工具痕跡）	密	良	灰白N7/0	口縁部 1/10	
13	003-01	土師器　甕	SB4 Pit1	2 D SK5	17.8 （推定）	―	―	内：口縁部ヨコナデ、口縁部～体部ハケメ（5本/㎝） 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（5本/㎝）	粗 2㎜以下の砂粒含	不良	淡黄2.5Y8/3	口縁部 1/8	内外面 煤付着
14	003-02	土師器　甕	SB4 Pit1	2 D SK5	19.0	―	―	内：口縁部ヨコナデ、口縁部～体部ハケメ（7～8本/㎝） 外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（5～6本/㎝）	粗 3㎜以下の砂粒含	不良	淡黄2.5Y8/4	口縁部 3/4	
15	004-01	土師器　甕	SK5	1 D SK9	23.9	―	―	内：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（4本/㎝） 外：口縁部ヨコナデ、体部摩滅の為不明	粗 2㎜以下の砂粒含	やや不良	明黄褐10YR7/6	口縁部 3/8	

第１表　出土遺物観察表

V　自然科学分析

1　はじめに

発シＡ遺跡では、弥生時代末期と考えられる焼失住居跡（ＳＨ１）が検出されている。住居内からは、住居構築材に由来すると考えられる炭化材が出土している。

本報告では、焼失住居跡から出土した木材・炭化材の放射性炭素年代測定を行い、遺構の時代時期に関する資料を得る。また、樹種同定を併せて行い、用材選択に関する資料を得る。なお、試料３点の中で、炭化していない木材１点は小片のため、年代測定は少量でも測定可能な加速器質量分析法で行う。また、炭化材２点については、十分な量が得られたことからβ線計数法で行う。

2　試料

試料は、焼失住居跡（ＳＨ１）から出土した木材３点（試料番号１～３）である。このうち、試料番号３を除く２点は炭化材である。

3　方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、β線計数法・加速器質量分析法共に株式会社加速器分析研究所（ＩＡＡ）の協力を得た。

(2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

4　結果

放射性炭素年代測定および樹種同定結果を第２表に示す。炭化材２点（試料番号１，２）の年代は、いずれも補正年代で2190BPと2290BPであった。一方、木材（試料番号３）は、190BP（補正年代170BP）であった。

これらの木材・炭化材の樹種は、木材が針葉樹のマツ属複維管束亜属、炭化材が落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属　マツ科

（*Pinus subgen. Diploxylon*）

試料は保存状態が悪く、年輪界の観察はできなかった。軸方向組織は仮道管を主とする。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、１～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節　ブナ科

（*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris*）

環孔材で、孔圏部は１列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

5　考察

(1) 年代について

木材・炭化材が出土した竪穴住居跡（ＳＨ１）は、弥生時代末期の頃のものと考えられている。炭化材２点の年代値は、補正年代で2190BPと2290BPであった。この年代値は弥生時代早期～前期に相当（日本第四紀学会ほか，1992）し、遺物から推定されている遺構の時代時期よりも古い。これについては、古材の再利用や樹齢による年代差などによる可能性も考えられるが、断定はできない。遺構の時代時期については、今回の試料や他の遺物の検出状況、住居跡の廃絶や埋積の状況などを含めて検討することが望まれる。

一方、炭化していない木材は、補正年代で170BPであり、近世の年代を示す。遺跡の立地を考慮すれば、炭化していない木材が1000年以上も残存するとは考えにくい。したがって、試料番号３については、

番号	地区	遺構	試料の質	樹　種	方法	年　代	δ13C(‰)	補正年代	Code No.
1	2A	SH1	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	β線		−26.9	2190±60BP	IAA-83
2	2A・3A	SH1	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	β線		−27.3	2290±70BP	IAA-84
3	2A	SH1	木材(未炭化)	マツ属複維管束亜属	AMS	190±30BP	−27.47 ±1.09	170±30BP	IAAA-10577

1）方法は、β線：β線計数法、AMS：加速器質量分析法
2）年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代はδ13Cの値を基に同位体補正を行った値。
3）放射性炭素の半減期は、5568年を使用した。

第2表　放射性炭素年代測定及び樹種同定結果

後世の撹乱などにより混入した可能性がある。

(2) 用材選択について

竪穴住居跡（SH1）は焼失住居跡であり、炭化材は住居構築材に由来する可能性がある。樹種は、いずれもクヌギ節であった。クヌギ節の木材は重硬で強度の高い材質を有する。三重県内では、北野遺跡で、弥生時代の住居構築材にクヌギ節が認められた例があり（未公表資料）、今回の結果とも一致する。一方、替田遺跡では、アカガシ亜属とコナラ節、弐ノ坪遺跡ではスダジイ、ツブラジイ、アカガシ亜属などが住居構築材に認められている。これらの種類は、いずれも重硬で強度が高い材質を有している。これらのことから、住居構築材には、主として強度の高い木材が選択・利用されたことが推定される。遺跡による種類構成の違いは、周辺植生の違いなどを反映している可能性がある。

一方、試料番号3の木材は複維管束亜属であった。炭化していないことや年代測定の結果から、後世の混入と考えられる。その由来が不明であるため、用材について検討することは難しい。

今後、周辺での住居構築材に関する資料をさらに蓄積して、地域差などを把握したい。また、古植生に関する調査も行い、用材選択と周辺植生との関係についても明らかにしたい。

[引用文献]

日本第四紀学会・小野　昭・春成秀爾・小田静夫編『図解・日本の人類遺跡』（東京大学出版会、1992年）242p.

Ⅵ　結　　語

今回の調査では、150㎡という狭小な調査区に比して、検出例の希少な焼失住居跡をはじめとした比較的高密度の遺構を確認することができた。本章では、今回調査で得られた資料の検討に加え、当遺跡の過去の調査結果を踏まえた考察を行い、結語としたい。

1　焼失住居（SH1）について

焼失住居と考えられるSH1で出土した、住居の建築部材とみられる炭化材の自然科学分析を行った結果、使用された樹木の種類は、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定されている。当遺跡の北東約500mに位置する北野遺跡では、平成4年度の第2次調査で確認された弥生時代後期の焼失住居跡[1]でも、同様のクヌギ節に同定された炭化材が検出されている。分析によると、クヌギ節の木材は、重厚で強度の高い材質を有しており、両者の事例から、材質の特性を心得た上で住居構築材の木材選定が行われていたと考えられる。また、近隣の遺跡にあり、時期も近似した両者の住居構築材が同様の木材を使用している事例は、当時の周辺の植生を解明する一助となろう。

次に、炭化材・焼土と土器の出土状況から焼失住居の検討を行った石野博信氏の論考[2]をもとに、SH1の検討を行いたい。氏は、弥生～平安時代の400余基の焼失住居跡の検討から、炭化材・焼土と土器の出土状況による類型化を試みている。そして、各類型別に火元や出火原因、各時代の実態と変遷、火災類型と上屋構造の関連性、集落内での位置付けなどを検討しており、これらに基づいてSH1の考察

を行った。

類型については、分析対象の60％を超える類型として「炭化材・焼土が住居全体に拡がるタイプ（全炭全焼型）」と、「炭化材・焼土が外区（主柱外区画＝主柱と周壁の間）に集中するタイプ（外炭外焼型）」に、それぞれ遺存土器の多寡（多いものをA型、少ないものをB型と記号化）の組み合わせから、平均的とする4類型が提示されている。SH1の場合、主柱穴の外側に炭化材が集中し、焼土は主柱穴の内外に認められる。ただし、ここでの主柱穴内側の焼土は炉跡の可能性もあり、火災に由来する焼土としては、外区のものと考えられる。この外区の焼土は、住居外の地山面にまで及んでおり、その痕跡は、火災で倒壊した住居構築材が地面で燃え尽きた姿を想定させる。また、出土土器は1点のみで、石器と合わせても生活用具としての遺物は2点のみである。従って、SH1は「外炭外焼B型」となる。

次に、「外炭外焼B型」に想定された火元や出火原因は、「住居内中央部を火元とする意図的放火」とされている。即ち、完全燃焼したために炭化材が遺存しなかった内区（主柱で囲まれた内側）が火力の最も強くなる火元とし、土器の少ないB型は日常用具を運び出した後の焼失とされる。弥生時代末期と考えられるSH1の屋内中央部に炉が存在した可能性は高いため、火元の想定は成り立つ。しかし、B型住居の出火原因が「意図的放火」であることから、石野氏の指摘のように、単に火元の問題だけではなく、住居の上屋構造との関連性が考えられる。火災類型と上屋構造の関連性については、火は空気の流れのよいところほどよく燃え、完全燃焼して炭化材を残さない可能性が高い点に着目し、火災類型別の上屋構造が想定されている。SH1の所属類型である「外炭外焼型」は、住居中央部が完全燃焼している類型で、屋内中央部に存在することが多い炉のために火元になる可能性が高いことと同時に、上屋に原始入母屋造と称される小屋がかけられ、その妻部が空気の流路になっていたことを示すとされる。B型住居が「意図的放火」であるならば、当該類型は火元よりもむしろ上屋構造との関連性を重視すべきと思われる。

「意図的放火」については、「戦乱によるもの」、「忌避的放火」、「住居の焼却」などが想定されているが、出火原因を特定するのは困難であり、SH1の場合も判断材料が無いため想定も難しい。しかし、各時代別の分析から、SH1の所属する弥生時代後期は特異な状況にあることから、特定の可能性が示されている。即ち、当該期はB型住居が分析サンプル中80％を超え、「意図的放火」による火災が大勢を占めることに加え、一集落の火災住居がB型だけで占められる事例が最も多いという事実は、時代背景にその要因があり、B型住居の出火原因の主な背景として「戦乱」が有力視されている。さらに、「戦火」による火災が、日常用具を運び出し得るB型住居と結び付くのかという疑問に対し、高地性集落に象徴される集落相互の見張り機能をもって、疑問の解消にあてている。極端な比高差はなく、高地性集落とは言い難いものの、SH1は南向する台地上に立地し、眼下の平野部をよく見通せる環境にある。従って、前述のような個面から、SH1が「戦乱」に起因するB型住居である可能性は示せるのではなかろうか。

以上のように、石野氏の論考に基づいて検討を行った結果、SH1について様々な想定が可能となった。ただし、この検討結果は、あくまで今回調査で得られた資料の範囲内での一見解であり、SH1の未調査部分や、さらには集落の全体像が判明した時点で再検討が必要である。石野氏は、これらの他にSH1の類型であるB型住居について、廃屋の火災や集落内での類焼の可能性、また、ここでは取り上げなかったその他の視点で多くの可能性を提示しており、不明なことの多い住居跡の上屋構造や、ひいては集落跡の全容を解明する上で焼失住居から得られる情報は多岐にわたり、極めて貴重な資料であると言えよう。

2　発シA遺跡について（今回調査までの総括）

発シA遺跡は、1972年（昭和47年）の幼稚園建設に伴う試掘調査で、土師器焼成坑及び掘立柱建物が検出されているが[2]、中でも土師器焼成坑の発見は、県内で土師器焼成遺構が初めて確認された事例であり、後に同遺構が斎宮跡周辺で多数発見され、この地域が土師器の一大生産地であった事実が解明され

る端緒ともなった。残念ながら、当時の社会情勢から、本調査が実施されないまま建設事業が行われたため、詳細は不明であるが、土師器焼成坑の時期は8世紀代とされ、当該期に当地で土師器生産が行われていたことは確実であろう。

2000年（平成12年）には、当宮川用水事業に伴い、今回調査区の南東部にあたる遺跡の南側縁辺部が調査された。調査の結果、時期不詳ながら古墳時代中～後期の可能性がある井戸及び、奈良～平安時代の自然流路が確認されている[4]。当該調査では、遺跡範囲の南方への拡大と南限が一部確定できたこと、さらに古墳～奈良時代とされた遺跡の存続時期が平安時代まで降る可能性が認められたこと等の成果が得られている。

今回の調査では、弥生時代末期～古墳時代初頭及び、飛鳥～奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物が検出された。また、飛鳥時代の竪穴住居跡（ＳＨ３）では、乳白色の粘土塊が検出されているが、当遺跡の北東約500ｍに位置する北野遺跡でも、同時期の竪穴住居跡の埋土中から、同様の粘土塊が検出されており、住居廃絶後、土師器製作に用いた粘土を廃棄していた可能性が指摘されている[5]。

今回の調査区周辺は、既設水路や付設の管理用道路の建設の際に、かなりの地形改変が行われており、既設水路の範囲は破壊を免れることはできなかった。しかしながら管理用道路の範囲は、若干の撹乱を受けてはいるものの、整地土が厚く盛られたことが幸いし、破壊を免れた。調査を通じて旧地形を復元した結果、南向した台地の縁辺部に遺跡は立地しており、集落跡としては絶好の立地条件であった。今回の調査では、遺跡範囲の西方への拡大と、範囲確認調査で得られた結果から、遺跡の西限が概ね確定できたと言える。また、遺跡の存続時期については、弥生時代末期の遺構が検出されたことで、当該期まで遡ることが確認された。さらに、平成12年の調査で弥生時代前期～中期の土器片が採取されており、当該期まで存続時期がさらに遡る可能性も予感させる。

以上のように、発シＡ遺跡について現在までに判明、あるいは想定できる事項を整理すると以下のようになる。

・弥生時代末期～古墳時代初頭、飛鳥～奈良時代の２時期に集落が営まれた。
・明確な遺構は検出されていないが、出土遺物から弥生時代前期～中期、古墳時代中期～後期、平安時代の遺構が今後確認される可能性があり、従って弥生時代前期～平安時代まで連綿と営まれた集落跡の可能性も想定できる。
・遺跡範囲が周知の範囲の西側及び南側に拡大し、かつ西限・南限がほぼ確定された。
・今回調査では、飛鳥～奈良時代の竪穴住居と、倉庫と想定される総柱の掘立柱建物が確認された。さらに、土師器の原料である可能性が高い乳白色粘土塊が確認されたため、土師器生産の傍証となる資料が得られたと言える。これらのことから、竪穴住居、倉庫としての掘立柱建物、原料の粘土、焼成坑、さらに時期不詳ながら井戸も検出されており、断片的ではあるものの、土師器の生産集落としての様相が明らかになりつつあると言えよう。

発シＡ遺跡の立地する同一丘陵支脈上には、東から発シＢ遺跡、垢場遺跡（旧称　発シＣ遺跡）、長五郎林Ｂ遺跡、片落Ｃ遺跡、戸峯遺跡、大道Ａ遺跡、世古Ｄ遺跡などの土師器生産遺跡が密集している。中でも発シＡ遺跡に隣接する発シＢ遺跡では、奈良時代の竪穴住居群、倉庫を含む掘立柱建物群、土師器焼成坑、井戸等が確認されている[6]。また、垢場遺跡では、７世紀代の竪穴住居と土師器焼成坑が確認されており[7]、これらの遺跡と発シＡ遺跡との関係が注目される。

〔註〕
① 『三重県埋蔵文化財センター年報４』（三重県埋蔵文化財センター、1993年）
② 石野博信『日本原始・古代住居の研究』（吉川弘文館、1993年）以下、ＳＨ１の考察は前掲書に拠る。
③ 『三重県埋蔵文化財年報３』（三重県教育委員会、1972年）
④ 小山憲一『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ　発シＡ遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、2002年）
⑤ 竹田憲治ほか『北野遺跡（第５次）発掘調査概要』（『古代の土師器焼成遺構について』北野遺跡の遺構と遺物見学・検討会資料、1994年）
⑥ 『三重県埋蔵文化財年報13』（三重県教育委員会、1983年）
⑦ 『三重県埋蔵文化財年報15』（三重県教育委員会、1985年）

調査風景（東から）

ＳＨ１実測風景（北から）

図 版 2

ＳＨ１遺物出土状況（東から）

ＳＨ１遺物出土状況（南から）

ＳＨ１土器出土状況（南東から）

ＳＨ１炭化木片出土状況（南から）

図版４

ＳＨ１完掘状況（東から）

ＳＨ３土器・粘土塊出土状況（東から）

ＳＢ４Ｐｉｔ１遺物出土状況（南東から）

ＳＫ５遺物出土状況（北から）

図版６

ＳＨ２・３（東から）

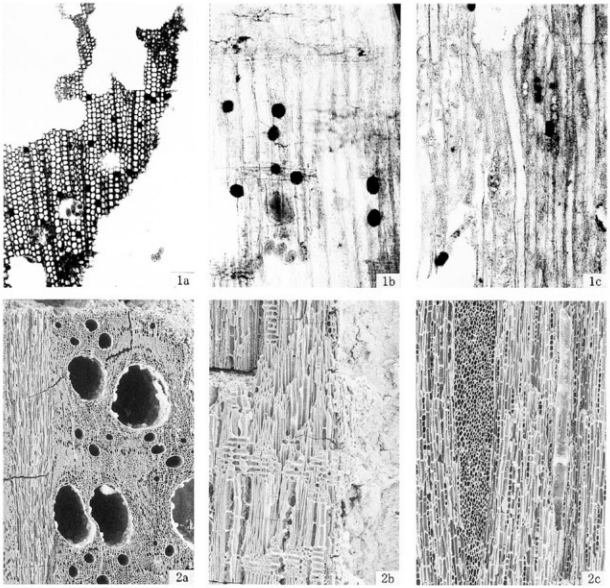
調査区全景（西から）

出土遺物（1：3）

図 版 8

出土遺物（1：3）

図 版 9



1. マツ属複維管束亜属（試料番号3）
2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号1）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:1a
200 μ m:1b, c
200 μ m:2a
200 μ m:2b, c

ＳＨ１出土の木材・炭化材

報告書抄録

ふりがな	おこしえいいせき　だいにじちょうさ
書名	発シA遺跡－第2次調査－
副書名	宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告V
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	208-5
編著者名	小山憲一
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596-52-1732
発行年月日	西暦　2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おこしえいいせき 発シA遺跡	みえけんたきぐん 三重県多気郡 めいわちょうになか 明和町有爾中 あざおこし 字発シ	24442	213	34° 31′ 02″	136° 37′ 27″	20011009 ～20011102	150㎡	国営宮川用水第二期土地改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
発シA遺跡	集落跡	弥生時代末期 ／ 古墳時代初頭	竪穴住居	敲石 弥生土器 古式土師器	弥生時代末期の焼失住居跡
	生産遺跡	飛鳥時代 ／ 奈良時代	竪穴住居 掘立柱建物 溝、土坑	土師器 須恵器	竪穴住居跡の床面で土師器製作の原料の可能性が高い乳白色粘土塊を検出

三重県埋蔵文化財調査報告　２０８－５
宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告V

発シA遺跡
－第2次調査－

２００３年３月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　有限会社 北尾印刷